

令和 5 年 6 月 19 日現在

機関番号：21601
 研究種目：基盤研究(C)（一般）
 研究期間：2019～2022
 課題番号：19K02077
 研究課題名（和文）家庭医・総合診療専門医のケアは何かどう違うのか？：質評価のための指標探索研究

研究課題名（英文）What makes the care of family physician/general practitioner different? : Exploring indicators for quality assessment

研究代表者
 葛西 龍樹（KASSAI, Ryuki）
 福島県立医科大学・医学部・教授

研究者番号：80248228

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,100,000円

研究成果の概要（和文）：国際協力を基盤に下記のテーマで研究成果を発表できた。プライマリ・ヘルス・ケア（PHC）政策導入レベルの国際比較、メンタルヘルスへのアクセス、世界家庭医機構とアジア太平洋経済協力のメンタルヘルス協働、PHCを測る指標の開発、コロナ禍での家庭医・総合診療専門医の役割、家庭医・総合診療指導医向け講習会の開発、家庭医療・総合診療の医学部実習への効果、糖尿病健診における過剰・過少医療、EBM教育と患者中心の医療の方法、患者アウトカム評価の指標、急性期病院の患者アウトカム、日本の高齢者の孤独、家庭医療・総合診療の臨床研修への効果。探索された指標を活用した、新たな大規模臨床研究が進行中である。

研究成果の学術的意義や社会的意義
 家庭医・総合診療専門医の専門性を示す『患者中心の医療の方法』の出版（2021年）は、『医学教育モデル・コア・カリキュラム』令和4年度改訂版の学修目標に「患者中心の医療」が加えられる端緒となった。PHC政策導入の国際比較研究は、世界家庭医機構（会員50万人）による国際Webinarシリーズ発展の基盤となった。財務省財務総合政策研究所刊行の『フィナンシャル・レビュー』と『Public Policy Review』への論文発表で、この分野の課題を国際的学際的に共有できた。日本経済新聞『経済教室』論考、日本医学ジャーナリスト協会講演、日本記者クラブ会見を通して、広く社会へ発信できた。

研究成果の概要（英文）：Based on the international cooperation, we were able to present research results on the following themes:

International comparison of primary health care (PHC) policy implementation levels / access to mental health care / collaboration in mental health care between the World Organization of Family Doctors (WONCA) and the Asia Pacific Economic Cooperation (APEC) / developing measures to capture PHC / roles of family doctors / developing Train-the-Trainer program / effects of undergraduate clinical training in family medicine and general practice / over- and under-provision of diabetes screening / EBM education and the patient-centered clinical method / quality indicators for treatment outcomes / treatment outcomes of acute care hospitals / loneliness in Japanese older adults / impact of family medicine clerkships.

An innovative large-scale clinical study is underway that utilizes the indicators we found.

研究分野：家庭医療学

キーワード：家庭医 総合診療専門医 プライマリ・ヘルス・ケア 専門性 指標 患者中心の医療の方法

1. 研究開始当初の背景

1978年にプライマリ・ヘルスケア（PHC）の重要性を述べた『アルマ・アタ宣言』が採択されてから40年が経った。この分野の専門医である家庭医・総合診療専門医の専門性については、世界では多くの研究の蓄積があり進展中である。一方、我が国ではこの分野の専門性の確立が非常に遅れたため、専門性の根幹をなす「医療の総合性（medical generalism）」や「患者中心のケア（patient-centered care）」についてまだ多くの誤解があり標準的な理解が浸透していない。そのことが専門性の確立を遅らせる悪循環になっている。

2. 研究の目的

本研究は、世界標準の家庭医療学を紹介し家庭医・総合診療専門医を育成してきた二人の研究者が、世界の研究協力者と議論しながら、改めて「家庭医・総合診療専門医の専門性は何か」「どうやってそれを教え・学べるか」「何を指標にそのケアの質を測るか」という学術的「問い」に対する答えを日本のケアの現場から探究する研究である。

3. 研究の方法

基本的には、＜先行研究・文献の詳細な検討＞＜ケア場面の分析＞＜世界のエキスパートとの検討＞＜若手家庭医・総合診療専門医との検討＞という4つの研究活動を統合しながら進めていった。新型コロナウイルス感染症の蔓延による行動制限があり、対面でのケア場面の記録が困難になったり、世界のエキスパートや若手家庭医・総合診療専門医との検討も対面で実施することができず、もっぱらオンライン会議システムを利用することになった。

4. 研究成果

本研究によって探索された家庭医・総合診療専門医の専門性、その教育方略、ケアの質測定指標については、想定以上に多くの研究に活用できた。以下に、その知見の概要を記載する。

（1）アジア太平洋地域6カ国のプライマリ・ヘルス・ケア（PHC）政策導入レベル国際比較

PHCは、公平で費用対効果が高く持続可能な保健医療に不可欠である。医療費の増加と人口の高齢化を背景に、PHCはユニバーサル・ヘルス・カバレッジ（UHC）を達成する鍵となる。本論文では、オーストラリア、マレーシア、モンゴル、ミャンマー、タイ、ベトナムにおけるPHC政策導入を検討した。共通する課題の解決のため、アジア太平洋地域での政策は以下に焦点を当てる必要がある。①官民セクター間のより良い協力、②テクノロジー、ヘルスリテラシー、専門職間の連携におけるギャップを埋めるための体系的情報共有アプローチ、③ケアの質を評価し、改善できるシステム構築、④地域密着型の質の高い研修プログラムの推進。

（2）PHCへの投資がメンタルヘルスへのアクセスを改善した国際ケーススタディ

2008年に世界保健機関（WHO）と世界家庭医機構（WONCA）によって発表された画期的な報告書『メンタルヘルスをプライマリ・ケアに統合する』において、PHCにおけるメンタルヘル・ケアに投資する理由が明らかにされた。ケアへのアクセスが改善され、よくあるメンタルヘルスの問題がより早く発見され、効果的にマネジメントされ、身体的問題とメンタルヘルスの問題が併存する患者にシームレスなケアが提供できる機会が増加する。より広範な社会的、

道徳的、政策的利益として、社会の統合を可能にし、偏見を軽減し、人権を保護することにつながる。このような効果にもかかわらず、PHCにおけるメンタルヘルス・ケアへの投資には未だ課題が多い。本書では、米国、香港、サウジアラビア、日本、ブラジル、ネパール、アフリカ諸国における過去10年間の進歩と課題が検討された。政策を実践に移すには、家庭医とPHC多職種スタッフに対する効果的かつ継続的なトレーニングが不可欠である。PHCサービス間の効果的なケア経路、紹介プロセスの改善、PHC自身への精神的サポートの提供も必要である。

(3) WONCAとアジア太平洋経済協力 (APEC) のメンタルヘルスでの協働プロジェクト
精神疾患は個人の幸福と国家の経済的繁栄に影響を与える。メンタルヘルスをPHCに統合することが鍵であるが、その統合は複雑なプロセスであり、複数のレベルで対処する必要がある。本研究では、WONCAとAPEC間の連携の枠組みの概要とAPEC諸国の地域社会のメンタルヘルスを改善するための次のステップを解説した。いくつかのAPECエコノミーの実現要因と現在のベスト・プラクティスを特定した。PHCでのメンタルヘルス・ケアに利益をもたらすデジタル技術、PHCスタッフ向けのトレーニング・プログラムの実施や、医療スタッフ向けのリソースへのアクセスを検討した。最後に、統合の強化を促進するための重要な次のステップを提案した。

(4) PHCの価値を測る指標の開発

PHCは、質の高い医療システムにとって不可欠な構成要素であり、特に脆弱な患者にプラスの影響を与える。健康全体のパフォーマンスに貢献し、医療システムをPHCに向けて方向転換した国々では、UHCの達成のための準備が整う。医療システムにおけるPHCの実際のパフォーマンスの監視は不可欠であるが、本研究のレビューによって、既存の指標では扱う定義が狭すぎて、PHCが扱う複雑な地域住民全体のケアの質をカバーできていないことがわかった。

さらなる作業が必要です。政策立案者と政府が医療システムの全体的なパフォーマンスの向上を目指す戦略的行動をとるためには、さらに意義のあるPHC測定指標の開発が必要である。

(5) コロナ禍での家庭医・総合診療専門医の役割の国際比較、特にPHCと公衆衛生の連携
PHCには、公衆衛生 (PH) とプライマリ・ケア (PC) の両方が含まれる。2020年には、コロナ禍によって今まで以上にPHとPCの統合された対策が必要となった。本研究では、WONCAの開発した標準的枠組みを用いて、フィジー、日本、マカオ、ニュージーランド、フィリピン、タイでのコロナ禍における統合されたPHCの発動状況の国際比較を行った。ニュージーランドでは、国境の早期かつ大幅な閉鎖により感染拡大が解消された。フィジーでは、行動制限への社会の理解が不足したため、パンデミック第二波の制御が困難だった。タイでは、社会全体が迅速な連携の重要性を認めたことが感染制御に貢献した。フィリピンでは、官民の連携はあったが、PCの関与は欠けていた。日本ではPCとPHの連携が不十分なため、患者発見と早期マネジメントが妨げられた。UHCが確立されているだけでは、コロナ禍に迅速に対応するには十分ではない。

(6) 家庭医・総合診療専門医指導医を対象にしたメンタルヘルスおよびコミュニケーション技法講習会の開発

本研究では、日本の家庭医療・総合診療の指導医を対象とした、うつ病の評価とマネジメント、およびコミュニケーション技法を専攻医へ教育するためのトレーニング・プログラムの共同開発と実施について報告した。WONCAと世界医療コミュニケーション学会 (EACH) の専門家 (英国、オランダ、オーストラリア、スペイン) が枠組みを開発し、日本の参加者との議論を繰り返して、現地のニーズと実情に合わせて調整され、実践とフィードバックに重点を置い

た、教訓的かつ経験的なトレーニング方法が採用された。参加者（指導医）が独自の指導技法を開発したため、日本での教育の普及を促進することに役立った。このプログラムから2年以上が経過した時点で、プログラムの多くの要素が引き続き日常診療と教育で使用されていた。

（7）家庭医療・総合診療の日本の医学部学生実習への効果

医学部卒前教育における家庭医療・総合診療クラークシップが与える影響を明らかにする目的で、テキストマイニングを使用して、3つの家庭医診療所で外来診療と在宅診療実習を行った医学部5年生124名が参加して、実習最終日に記載する振り返り（省察）の文章を分析した。テキスト・マイニングを使用して、文章から最も頻繁に使用される単語（名詞）を抽出し、共起ネットワークマップを作成して検討した。抽出された文の総数は321、単語の総数は10,627で、した。頻出単語トップ5は、患者、訪問、診療、医療、そして家族であり、共起ネットワークマップからは、在宅診療と家族の間に関係性が認められた。在宅医療環境で、医学生が患者だけでなく家族へのケアの必要性を学ぶ可能性があることが示された。

（8）糖尿病健診における過剰・過少医療から考察する家庭医・総合診療専門医の役割

我が国の国民医療費は2018年度において43兆円を超えるが、そのうち1兆2,059億円は糖尿病の医療費である。薬効別売上金額も毎年数%ずつ伸び続けており、2020年度では糖尿病治療剤は抗腫瘍剤について2位となっている。これだけ多くの医療費や薬剤費を糖尿病の治療に費やしても、糖尿病が要因の透析患者は増え続けており、人口比の日本の慢性透析患者数は国際比較でも飛び抜けて多い。我が国における糖尿病の在院日数は非常に長く、費用便益分析からもそれが正当化されるとは言い難い。重度の糖尿病と判断される多くの対象者が糖尿病の治療を受けていない可能性が示唆された。糖尿病スクリーニングの国際比較では、日本では、①糖尿病に罹患するリスクを評価していない、②リスクや血糖値に関係なく健診を年1回実施している、そして③最新最良の臨床研究のエビデンスを考慮して更新していないことが明らかになった。日本でハイリスクの人に予防医療の受診を促す方策はなぜうまくいかないのかを考察し、健診と医療が有機的に連携するために必要な方策を提案した。

（9）家庭医・総合診療専門育成におけるEBM教育と患者中心の医療の方法

過剰医療と過少医療を是正し適正医療を多く実現するには、保健医療サービス提供者、利用者、行政担当者などの気づきと行動が必須である。人間の認知・行動が関わる領域であるだけに行動変容は容易ではない。臨床研究のエビデンスがあること（evidence）、診療ガイドラインや学会などの推奨があること（eminence）、そして経済的インセンティブがあること

（economics）が影響力を持つ。それに加えて、保健医療専門職の教育（education）、特に利用者の感情（emotion）にも配慮し、費用対効果も考慮に入れた「患者中心の医療の方法」を理解し実践できるPHC専門職の果たす役割が重要である。海外の過剰医療と過少医療を減らす取り組みを参考にすると、我が国でも相当の財政効果が見込める。本論文では、健診・検診、スクリーニングの定義を再考し、肺がん検診・スクリーニングを例として過剰医療と過少医療を検討した。

（10）地域医療機関の患者アウトカム評価の指標

本研究では、二次保健医療圏において急性期病院の治療アウトカムを比較するにあたり、どのような情報が活用でき、またどのようなデータ利用の制約が存在するのかを考察した。諸外国の公的機関では、地域の医療機関の質指標（QI）を公表しており、公表によって治療アウトカムの市民への可視化をはかり、医療機関の治療の質の改善を図っている。代表例の1つが英国のPCを対象としたQOF（Quality and Outcomes Framework）の審査と評価の仕組みである。日本

においては、診療所の治療の質を評価しておらず、病院については2006年度からDPC/PDPSという支払方式を採用する一部の施設の治療実績等がようやく疾患ごとに公表されるようになった。しかし、少数事例がマスキングされるなどの公表時の制限があり、また、集計の原票となる個票データにおいても、疾患の重症度や合併症の情報の報告率が医療機関ごとに異なるため、十分に活用できない状態にある。医療情報活用による保健医療政策の改善のためには、集計情報の開示と個票情報における重要事項の入力の義務化が欠かせない。

(11) 急性期病院の患者アウトカムのケーススタディ

本研究では、ある二次保健医療圏において急性期医療を担う主要3病院の治療アウトカムを比較した。現在、急性期の病床が将来の必要水準に対して過剰、回復期の病床が過少であり、急性期医療機能の質的な維持をしながら量的な機能を回復期に転換することが課題となっている。そこで、心不全・心筋梗塞・脳卒中・肺炎・大腿骨骨折という、医療圏内で治療の質が保たれることが住民の健康にとって重要な疾患を例に、死亡率・在院日数・退院時の日常生活動作の指標・入院1日当たりの日常生活動作指標の変化を病院間で比較・考察した。5疾患について3病院での死亡率の差異は認められなかったものの、在院日数・1日あたりの日常生活動作指標の変化には有意差が存在した。背景には、在院日数の適正化や、患者の病態と病床機能との整合性を図ることの難しさが示された。治療アウトカムの比較に際して個票データの未整備も明らかとなり、各地域の医療体制を客観的に比較することの意義と限界が明らかになった。

(12) 日本の高齢者の孤独への家庭医と看護師の気づき

本研究では、日本の家庭医と看護師が患者の孤独を見落とししたり誤った判断をしたりする頻度と患者の特徴を調査することを目的に、2つの家庭医診療所を訪れた50歳以上の患者470人が参加して実施した。家庭医の場合、孤独の誤った判断（患者が孤独ではないと自己評価しているにもかかわらず孤独であると認識した）の割合は20.2%だった。孤独を見逃している（患者が孤独であると自己評価しているが孤独ではないと認識した）割合は20.9%であった。看護師については、判断を誤る割合は9.6%、孤独を見逃している割合は29.8%だった。孤独を見逃す確率は、未婚・離婚または死別した患者、地域活動に参加していない患者、一人暮らしの患者では不一致が有意に高くなり、日本の家庭医と看護師にとって、婚姻状況、生活環境、地域活動への参加に基づいて患者の孤独を認識することが難しいことを示している。

(13) 家庭医療・総合診療の日本の臨床研修医研修への効果

家庭医療・総合診療の卒後教育への効果は国際的に認められているが、日本からの報告はほとんどない。常勤家庭医のいる1つの病院と4つの診療所のいずれかで1ヶ月間の地域医療研修を経験した初期研修医91人が参加して、研修医の自己評価、研修開始前と終了後家庭医による研修医の評価を行った。評価項目は、臨床研修ガイドライン2020年版に準拠して、「指針」に示された目標に基づき10分野36項目にわたり、10ポイントのリッカート尺度で評価した。彼らの自己評価は全36項目で統計的に有意な増加となった。33項目では効果量が大きかった。家庭医の評価は、全36項目で8~9点だった。家庭医療・総合診療の卒後研修は、日本の初期研修においても、臨床研修において求められるさまざまな臨床能力を獲得することに貢献していた。

本研究の全体のまとめとして、家庭医・総合診療医の専門性として、重要な慢性の病気での生活習慣への行動科学的介入について、日本全国の家庭医診療所のネットワークを構築してクラスター・ランダム化比較試験を計画することができた。この研究デザインは『Trials』に出版されるなど一定の評価を得ることができており、目下研究参加者のリクルート中である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計19件（うち査読付論文 17件 / うち国際共著 6件 / うちオープンアクセス 17件）

1. 著者名 Thomas Rouyard, Mei Endo, Ryota Nakamura, Michiko Moriyama, Maham Stanyon, Satoshi Kanke, Koki Nakamura, Cynthia Chen, Yasushi Hara, Masako Ii, and Ryuki Kassai.	4. 巻 24
2. 論文標題 Fukushima study for Engaging people with type 2 Diabetes in Behaviour Associated Change (FEEDBACK): Study protocol for a cluster randomized controlled trial.	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 Trials	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1186/s13063-023-07345-6	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 該当する
1. 著者名 Koki Nakamura, Satoshi Kanke, Atsushi Ishii, Fuyuto Mori, Goro Hoshi, Kanako Kanto, Yoshihiro Toyoda, Ryuki Kassai.	4. 巻 69
2. 論文標題 Impact of general practice / family medicine training on Japanese junior residents: A descriptive study.	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 Fukushima Journal of Medical Science	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.5387/fms.2022-35	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -
1. 著者名 Kazumitsu Nawata, Masako Ii, and Ryuki Kassai.	4. 巻 19
2. 論文標題 Over- and under-provision of diabetes screening: Making more efficient use of healthcare resources.	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 Public Policy Review	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.57520/pripr.19.1-1	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -
1. 著者名 Ryuki Kassai and Masako Ii.	4. 巻 19
2. 論文標題 Reducing the tendency for over- and under-provision of health services at the point of care: The roles of evidence-based medical education and the patient-centered clinical method.	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 Public Policy Review	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.57520/pripr.19.1-2	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Yukiko Ito and Ryuki Kassai.	4. 巻 19
2. 論文標題 Quality indicators for treatment outcomes of regional medical institutions.	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 Public Policy Review	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.57520/pripr.19.1-3	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Yukiko Ito, Takaaki Ikeda, Satoshi Kanke, Ryuki Kassai, and Masayasu Murakami.	4. 巻 19
2. 論文標題 Comparison of treatment outcomes of acute care hospitals in Okitama secondary medical-care area of Yamagata prefecture.	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 Public Policy Review	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.57520/pripr.19.1-4	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Kazutaka Yoshida, Koki Nakamura, Goro Hoshi, Satoshi Kanke, Aya Goto, and Ryuki Kassai.	4. 巻 19
2. 論文標題 Primary health care practitioners' perception of patient loneliness in Japanese older adults: A cross-sectional study.	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 SSM - Population Health	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1016/j.ssmph.2022.101143	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 葛西龍樹	4. 巻 7月14日
2. 論文標題 専門性の高い家庭医育成急げ	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 日本経済新聞『経済教室』	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 葛西龍樹	4. 巻 6月
2. 論文標題 医療人材の育成方法にメスを：地域に必要な専門性とは	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Wedge	6. 最初と最後の頁 62-64
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Sairat Noknoy, Ryuki Kassai, Neil Sharma, Leilanie Nicodemus, Carlos Canhota, Felicity Goodyear-Smith.	4. 巻 71
2. 論文標題 Integrating public health and primary care: the response of six Asia-Pacific countries to the COVID-19 pandemic.	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 British Journal of General Practice	6. 最初と最後の頁 326-329
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.3399/bjgp21X716417	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 該当する

1. 著者名 Evelyn van Weel-Baumgarten, Jill Benson, Goro Hoshi, Clare Hurle, Juan Mendive, Chris Dowrick, Ryuki Kassai.	4. 巻 104
2. 論文標題 Co-creation and collaboration: A promising approach towards successful implementation. Experience from an integrated communication and mental health skills training programme for Japanese General Practice.	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Patient Education and Counseling	6. 最初と最後の頁 2386-2392
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1016/j.pec.2021.07.027	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 該当する

1. 著者名 Koki Nakamura, Satoshi Kanke, Goro Hoshi, Yoshihiro Toyoda, Kazutaka Yoshida, Ryuki Kassai.	4. 巻 68
2. 論文標題 Impact of general practice/family medicine clerkships on Japanese medical students: Using text mining to analyze reflective writing.	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Fukushima Journal Medical Science	6. 最初と最後の頁 1-6
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 縄田和満, 井伊雅子, 葛西龍樹.	4. 巻 148
2. 論文標題 糖尿病健診における過剰と過少 医療資源の効率利用に関する研究	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 フィナンシャル・レビュー	6. 最初と最後の頁 3-34
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また, その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 葛西龍樹, 井伊雅子.	4. 巻 148
2. 論文標題 ケアの現場で陥りやすい過剰・過少医療を減らすために: EBM 教育と患者中心の医療の役割.	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 フィナンシャル・レビュー	6. 最初と最後の頁 40-60
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また, その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 伊藤由紀子, 葛西龍樹.	4. 巻 148
2. 論文標題 地域の医療機関の治療アウトカム評価の指標.	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 フィナンシャル・レビュー	6. 最初と最後の頁 67-87
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また, その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 伊藤由希子, 池田登頭, 菅家智史, 葛西龍樹, 村上正泰.	4. 巻 148
2. 論文標題 山形県置賜二次保健医療圏における急性期病院の治療アウトカムの比較.	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 フィナンシャル・レビュー	6. 最初と最後の頁 94-128
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また, その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Ryuki Kassai, Chris van Weel, Karen Flegg, Seng Fah Tong, Tin Myo Han, Sairat Noknoy, Myagmartseren Dashtseren, Pham Le An, Chirk Jenn Ng, Ee Ming Khoo, Kamaliah Mohd Noh, Meng-Chih Lee, Amanda Howe, Felicity Goodyear-Smith.	4. 巻 該当なし
2. 論文標題 Priorities for primary health care policy implementation: recommendations from the combined experience of six countries in the Asia-Pacific.	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Australian Journal of Primary Health	6. 最初と最後の頁 該当なし
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1071/PY19194	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 該当する

1. 著者名 Chris Dowrick, Ryuki Kassai, Cindy LK Lam, Raymond W Lam, Garth Manning, Jill Murphy, Chee H Ng, Chandramani Thuraisingham.	4. 巻 13
2. 論文標題 The APEC Digital Hub-WONCA Collaborative Framework on Integration of Mental Health into Primary Care in the Asia Pacific.	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Journal of Multidisciplinary Healthcare	6. 最初と最後の頁 1693-1704
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 該当する

1. 著者名 Tim C olde Hartman, Andrew Bazemore, Rebecca Etz, Ryuki Kassai, Michael Kidd, Robert L Phillips Jr, Martin Roland, Kees van Boven, Chris van Weel, Felicity Goodyear-Smith.	4. 巻 該当なし
2. 論文標題 Developing measures to capture the true value of primary care.	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 BJGP Open	6. 最初と最後の頁 該当なし
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.3399/BJGPO.2020.0152	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 該当する

〔学会発表〕 計11件 (うち招待講演 8件 / うち国際学会 7件)

1. 発表者名 Ryuki Kassai
2. 発表標題 Family Medicine in Japan: 三十年友誼的故事
3. 学会等名 Family Medicine Seminar, National Taiwan University Hospital (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 葛西龍樹
2. 発表標題 患者中心の医療の方法：家庭医・総合診療医の専門性
3. 学会等名 日本記者クラブ会見「かかりつけ医を考える」（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Ryuki Kassai
2. 発表標題 Nuclear disasters in the Marshall Islands and Fukushima: Lessons learned.
3. 学会等名 Greater Boston Physicians for Social Responsibility Monthly Meeting (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 葛西龍樹
2. 発表標題 福島県立医科大学における地域・家庭医療学の取り組み
3. 学会等名 2022年医学医療交流セミナー「全人的医療をめざしたシステムの構築 - 総合診療医とホスピタリストの課題と展望 -」（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 葛西龍樹
2. 発表標題 家庭医・総合診療医における世界と日本の潮流と当面する課題
3. 学会等名 日本医学ジャーナリスト協会11月例会（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 葛西龍樹
2. 発表標題 若手家庭医にとっての国際交流の魅力 Kick off the International Kaizen Project Led by Young Family Doctors.
3. 学会等名 第13回日本ブラマリ・ケア連合学会学術大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Ryuki Kassai
2. 発表標題 Role of Family Doctors in Times of Conflicts and Natural Disasters: 2011 Japan Tsunami Experience & Fukushima Nuclear Disaster
3. 学会等名 The 23rd World Conference of Family Doctors (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Ryuichiro Sasae, Masako Ii, Mamoru Ichikawa, Maham Stanyon, Ryuki Kassai.
2. 発表標題 Decision-making under uncertainty: results from a multisector 'think tank' exploring how to make a difference in Japan.
3. 学会等名 The 25th WONCA Europe Conference (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Ryuki Kassai
2. 発表標題 Family doctors and depression: The Japanese Train-the-trainers Programme [background]
3. 学会等名 WONCA Asia Pacific Regional Conference 2019 (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Ryuki Kassai
2. 発表標題 Family doctors and depression: The Japanese Train-the-trainers Programme [evaluation]
3. 学会等名 WONCA Asia Pacific Regional Conference 2019 (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Maham Stanyon, Satoshi Kanke, Toshiharu Kitamura, Koki Nakamura, Ryuki Kassai
2. 発表標題 Identity development during specialty training in the figured world of family medicine: a cross cultural analysis
3. 学会等名 North American Primary Care Research Group Annual Meeting (国際学会)
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 葛西 龍樹、若手医師によるグローバルにプライマリ・ケアを考えるための翻訳研究会、Moira Stewart, Judith Belle Brown, W Wayne Weston, Ian R McWhinney, Carol L McWilliam, Thomas R Freeman.	4. 発行年 2021年
2. 出版社 羊土社	5. 総ページ数 455
3. 書名 患者中心の医療の方法 原著第3版	

1. 著者名 Christopher Dowrick, Joseph Adekunle Ariba, Sandra Fortes, Kim Griswold, Pramendra Prasad Gupta, Ryuki Kassai, Abdullah al-Khatami, Cindy Lam, Donald Li.	4. 発行年 2020年
2. 出版社 World Federation for Mental Health	5. 総ページ数 168
3. 書名 Mental Health For All: Greater Investment - Greater Access.	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分 担 者	菅家 智史 (Kanke Satoshi) (60644135)	福島県立医科大学・医学部・講師 (21601)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関